

# 『伊勢物語集註』における『毛詩』の引用

安 倩

はじめに

『伊勢物語集註』（以下、『集註』とする）は、一華堂切臨（一五九——一六六二）によって編纂された『伊勢物語』の注釈書である。慶安元年（一六四八）九月に成立し、慶安五年（一六五二）に初版本が刊行された。序文によると、当時流布していた『伊勢物語愚見抄』や『伊勢物語闕疑抄』には書写の誤りが多く、相伝の正義の遺漏も多いため、諸注を参照・取捨選択し、三条西実澄から切臨の師である乗阿へ伝えられた「奥義」を軸に構成したものという。その中に『毛詩』（詩経）、『周易』、『礼記』などの経書を中心とする五十部近くの漢籍を詳しく引用することに注目される。

特に『毛詩』を引用する注釈は、百二十五段のうち、四十一段がある。さらに、初段注の中に『毛詩』を一回以上引用する場合も少なくない。例えば、『集註』第一段注には『毛詩』の小雅「采薇」、邶風「柏舟」、鄭風「将仲子」、小雅「賓之初筵」、王風「葛藟」という五つの篇、第六段注に、『毛詩』の小雅「采薇」、鄭風「大叔于田」、邶風「桑中」、秦風「黃鳥」という四つの篇がそれぞれ引用されている。このように『毛詩』を高頻度で引用するのは、『集註』以前の『伊勢物語』注釈書

には全く見られない現象と言える。

先行研究の状況を見るに、大津有一氏「切臨の伊勢物語集註」<sup>③</sup>と山本登朗氏「鉄心齋文庫 伊勢物語集註 解題」、『伊勢物語集註の位置』<sup>④</sup>などがあるが、書誌データ、概要などについての紹介が中心で、漢籍引用の仕方、注釈態度などに関する具体的な研究はほとんどなされてこなかった。宗祇・三条西家流を中心とする旧注の研究の中の言及はあるが、『集註』を中心とする研究はほとんどない状況である。本論文は、『集註』における『毛詩』引用部分に注目し、『毛詩』の引用実態と『集註』の注釈態度について考察する。

## 一

最初に結論的なことを先取りして言う、『集註』が引用する『毛詩』は直接引用ではなく、清原宣賢（一四七五——一五五〇）による『毛詩』の問書『毛詩抄』を経由して引用したものと推測される。この問題について、第六段注と第二十三段注を具体例としてとりあげて考察したい。第六段注と第二十三段注を例として考察する理由は、それぞれ『集註』の『毛詩』引用の典型的な二つのパターンと言えるためである。第六

段注は、『毛詩抄』を忠実に引用していると見られるのに対し、第二十三段注は、『毛詩抄』から得た儒教的な概念をふまえて『伊勢物語』を注釈している。

『伊勢物語』第六段は以下のとおりである。

むかし、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きに来けり。芥川といふ河を率ていきければ、草の上に置きたりける露を、「かれは何ぞ」となむ男に問ひける。ゆく先おほく、夜もふけにければ、鬼ある所ともしらで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる倉に、女をば奥におし入れて、男、弓、胡籥を負ひて戸口にをり、はや夜も明けなむと思つたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。「あなや」といひけれど、神鳴るさわぎに、え聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば率て来し女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。白玉か何ぞと人の問ひし時つとこたへて消えなましもの

これは、二条の後の、いとこの女御の御もとに、仕うまつるやうにてゐたまへりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひていでたりけるを、御兄、堀河の大匠、太郎国経の大納言、まだ下臈にて、内裏へ参りたまふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とどめてとりかへしたまうてけり。それをかく鬼とはいふなりけり。まだいと若うて、後のただにおはしける時とや。

ここでは傍線部の「(男)弓、胡籥を負ひて」に注目した

い。「弓、胡籥」について、『集註』は次のように注釈している。(『集註』本文には適宜、句読点を付した。それ以外はすべて原文のままである)

詩経采薇の篇に、弓とは糸にてまき漆にてぬりしこめたを云。珥は象の骨にて本末のはずをかざり、白木のぬらぬを云。魚服と云は、魚と云獸の皮にてしたる、やなぐひ也。盛矢器也。とて矢を取る物也。

毛詩の四卷大叔于田篇ニ曰ク、抑、枳、柵、忌、抑、鬯、弓ヲ忌云。抑とは大叔をさす、田はて、弓矢をとりをく也。忌は置字也、よまぬ也。毛萇曰、柵ハ所ヘン以覆レ矢也とは、矢筒の蓋也。

矢を入為に蓋をとる也。小笠原家に秘蔵する字也。蕨は西の宮の抄にあり、胡籥は玉篇ニ曰ク籥胡一箭ノ室也。

左伝昭二十五年ニ曰、公徒執、冰而蹈、水云々。服虔が注に冰、櫃丸蓋とす、矢筒の蓋也。其にて飲を取べしとあり、水など吞やうなる物也。

ここでは『毛詩』の「采薇」と「大叔于田」の、「弓やなくひ」にかかわる内容を引用している。「采薇」篇についての引用部分、「珥は象の骨にて本末のはずをかざり、白木のぬらぬを云。魚服と云は、魚と云獸の皮にてしたる、やなぐひ也。盛矢器也。とて矢を取る物也」は、「珥」、「魚服」の語釈と見られる。『毛詩』「采薇」篇の、

駕彼四牡 四牡騤騤

君子所依 小人所腓

四牡翼翼 象弭魚服

豈不日戒 獵狁孔棘

と、『毛詩抄』の、

彼の四牡に駕す、四牡駢駢<sup>ツキ</sup>たり。

君子の依る所、小人の駢<sup>ツキ</sup>る所なり。

四牡翼翼<sup>ヲク</sup>たり。象の弭<sup>ゆみ</sup>・魚の服<sup>はす</sup>あり。

豈日に戒めさらむや。獵狁<sup>やぐみ</sup>孔棘<sup>すみや</sup>なり。

とをあわせて見ると、『毛詩抄』は傍線を付した「象弭魚服」に関する言及であることがわかる。この部分については、

「毛伝」では、

象弭、弓反末也、所<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>解<sup>レ</sup>紿<sup>レ</sup>也。魚服、魚皮也。

「鄭箋」では、

弭弓反末弩者、以<sup>レ</sup>象骨<sup>二</sup>為<sup>レ</sup>之。以<sup>レ</sup>助<sup>三</sup>御者解<sup>二</sup>髻<sup>一</sup>、宜<sup>レ</sup>滑也。服、矢服也。

と見られ、また、『毛詩正義』では、

正義曰、釈器云、弓有<sup>レ</sup>縁者謂<sup>二</sup>之弓<sup>一</sup>。孫炎曰、縁謂<sup>二</sup>繳束而漆<sup>レ</sup>之。又曰、無<sup>レ</sup>縁者謂<sup>二</sup>之弭<sup>一</sup>。孫炎曰、不<sup>二</sup>以<sup>レ</sup>繳束、骨飾<sup>二</sup>兩頭<sup>一</sup>者也。然則弭者、弓稍之名、以<sup>二</sup>象骨<sup>一</sup>為<sup>レ</sup>之。是弓之末弭。弛<sup>レ</sup>之則反曲、故云、象弭為<sup>二</sup>弓反末<sup>一</sup>也。繩索有<sup>レ</sup>結、用<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>解<sup>レ</sup>之、故曰、所<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>解<sup>レ</sup>紿<sup>レ</sup>也。紿<sup>レ</sup>与<sup>レ</sup>結義同。魚服、以<sup>二</sup>魚皮<sup>一</sup>為<sup>二</sup>矢服<sup>一</sup>、故云<sup>二</sup>魚服魚皮<sup>一</sup>。左伝曰、婦<sup>二</sup>夫人魚軒<sup>一</sup>。服虔云、魚獸名。則魚皮又可<sup>二</sup>以<sup>レ</sup>飾<sup>レ</sup>車也。陸機疏曰、魚服、魚獸之皮也。魚獸以<sup>レ</sup>猪、東海有<sup>レ</sup>之。其皮上斑文、腹下純青。今以為<sup>二</sup>弓韃步叉<sup>一</sup>者也。（中略）夏官・司弓矢職曰、仲秋獻<sup>二</sup>矢服<sup>一</sup>、注云、服、盛<sup>レ</sup>矢器也、以<sup>二</sup>獸皮<sup>一</sup>為<sup>レ</sup>之。是矢器謂<sup>二</sup>之服<sup>一</sup>也。

と見られる。これは、『毛詩抄』に、

象の骨をもつて、もとはず、末はずを、かざつた弓ぞ。魚は獸ぞ。うをではない、東海にあるぞ。その皮でした、やなぐひぞ。矢をいるゝものぞ。周礼に、夏官の司弓矢職に、仲秋獻矢服。注、服は盛矢器也、以獸皮為之。弓は糸をもつて、あそこゝをまいて、漆でぬつた、しこめたを、弓と云、しこめぬをば弭と云ぞ。象の骨をもつてかざつたを、弭と云ぞ。ゆみをはづいてをくときに、そつてある程に、それるゆみと云ぞ。

とあることと共通し、内容もほぼ一致する。『集註』には「毛詩：曰」、「毛萇曰」など明記されているが、原典からの直接引用ではなく、『毛詩抄』経由の引用である可能性が高いと推測される。

具体的に見ると、『集註』の「弭は象の骨にて本末のはずをかざり、白木のぬらぬを云」は、「毛伝」の「弓反末也」、「鄭箋」の「弭弓反末弩者、以象骨為之」等をふまえた『毛詩抄』の記事と内容的に共通する。また、『集註』の「魚服と云は、魚と云獸の皮にてしたる、やなぐひ也。盛矢器也。とて矢を取る物也」の部分も、「毛伝」の「魚服、魚皮也」、「鄭箋」の「服、矢服也」をふまえたと見られる『毛詩抄』の「魚は獸ぞ。うをではない、東海にあるぞ。その皮でした、やなぐひぞ。矢をいるゝものぞ」と類似している。つまり『集註』の「象弭魚服」についての説明は、『毛詩』注釈をふまえた『毛詩抄』に見られるもので、『集註』はその『毛詩抄』に依拠したものと推測される。

次に、『集註』が「毛詩四卷大叔于田篇曰、抑枳柵忌抑鬯弓忌云」と、『毛詩』「大叔于田」に言及している部分を見たい。引用される「抑枳柵忌抑鬯弓忌云」は、『毛詩』「大叔于田」に、

叔于田 乘乘錫

兩服齊首 兩驂如手

叔在藪 火烈具阜

叔馬慢忌 叔發罕忌

抑枳柵忌 抑鬯弓忌

と見られ、『毛詩抄』では、

叔が田に于くときに、乘錫に乘る。

兩服首を齊しうす、兩驂手の如し。

叔が藪に在るときに、火烈して具に阜なり。

叔が馬・慢し、叔発つこと罕なり。

抑ひとにして柵を積く、抑ひとにして弓を鬯にす。

とある。『毛詩』原文や『毛詩抄』の「抑枳柵忌」の「柵」は、『集註』で「柵」と表記されており、「柵」について、「ヤナグヒ」という読みを記す。これについては、『毛詩』や『毛詩抄』の「柵」を「柵」と誤写した可能性があるのではないか。

『集註』の「大叔于田」篇の引用は、「抑とは大叔をさす、

田はてゝ、弓矢をとりをく也。忌は置字也、よまぬ也」と、

「抑」、「忌」についてわかりやすく説明しているが、この内容は「鄭箋」に「射者蓋矢斨弓、言田事畢」、「毛伝」に

「忌、辞也」と見られ、これらをふまえた『毛詩抄』に「抑、

大叔をさいたぞ」、「忌はをき字と云心ぞ」とある。

『集註』の「毛萋曰柵所以覆矢也とは、矢筒の蓋也。矢を入

為に蓋をとる也」という部分は、「毛伝」の引用と説明のように見えるが、『毛詩抄』の「矢を入うとて、矢筒のふたを取たぞ」、「柵は矢づつのふたぞ」などにも見られる。

ここまで見てきたように『集註』は「大叔于田」の原文や「毛伝」などを引用しているように見えるが、「采薇」篇の引用と同じように、それは『毛詩抄』と共通している内容である。

『集註』の「毛詩」は『毛詩』そのものではないというだけでなく、「伝箋」、さらに「毛詩正義」など、『毛詩』とともに享受された注釈書を経由した引用でもないことが窺われる。

さらに、続く部分、「小笠原家に秘蔵する字也」に注目したい。

この「小笠原家」は知られているように、武家故実の流派である。弓馬術・礼法の武家故実の伝承を徳川家に伝えて一流を成し、小笠原流と称す。江戸時代には兵学や軍学のみならず、礼儀作法として小笠原流が流行した。この「小笠原家に秘蔵する字也」の「字」とは、直前の「毛萋曰柵所以覆矢也とは、矢筒の蓋也。矢を入為に蓋をとる也」の内容と関連して、「柵(柵)」を指していると推測される。

『集註』の「小笠原家に秘蔵する字也」の部分は何を根拠としてこのような解釈を得たのだろうか。まず、「抑枳柵忌 抑鬯弓忌」について、『毛詩正義』に、

柵、所<sub>二</sub>以覆<sub>レ</sub>矢。鬯弓、斨弓。箋云、射者蓋<sub>レ</sub>矢斨弓、言<sub>二</sub>田事畢<sub>一</sub>。柵音冰、所<sub>二</sub>以覆<sub>レ</sub>矢也。馬云、櫜丸蓋也。

杜予云、櫜丸、箭筒也。鬯、敕亮反。斨、吐刀反。疏叙于至<sub>二</sub>弓忌<sub>一</sub>。正義曰、毛以為、叔往<sub>二</sub>田獵<sub>一</sub>之時、乘<sub>二</sub>一乘之鴟馬<sub>一</sub>。其内兩服、則齊<sub>二</sub>其頭首<sub>一</sub>、其外兩驂、進止如<sub>二</sub>御

者之手<sup>一</sup>。乘<sup>二</sup>此車馬<sup>一</sup>、從<sup>レ</sup>公田獵。叔之在<sup>二</sup>於藪<sup>一</sup>也、火有<sup>二</sup>行列<sup>一</sup>、其光俱盛。及<sup>二</sup>田之將<sup>レ</sup>罷、叔之馬既遲矣、叔發<sup>レ</sup>矢又希矣。及<sup>二</sup>其田畢<sup>一</sup>、抑者叔執<sup>レ</sup>柎以覆<sup>レ</sup>矢矣、抑者叔執<sup>レ</sup>鬯以弼<sup>レ</sup>弓矣。既美<sup>二</sup>叔之多才<sup>一</sup>、遂終<sup>レ</sup>說<sup>二</sup>其田之事<sup>一</sup>。鄭唯如<sup>レ</sup>手、如<sup>二</sup>三人相助<sup>一</sup>為<sup>レ</sup>異。余同。以如者比<sup>二</sup>諸外物<sup>一</sup>、故易<sup>レ</sup>伝。伝、驪白雜毛曰<sup>レ</sup>鵠。正義曰、積畜文。郭璞曰、今呼<sup>レ</sup>之為<sup>二</sup>鳥驪<sup>一</sup>。慢、遲。罕、希者。以<sup>二</sup>情誤者<sup>一</sup>必遲緩、故慢為<sup>レ</sup>遲也。釈詁云、希、罕也。是罕為<sup>レ</sup>希也。伝柎所収至<sup>二</sup>弼弓<sup>一</sup>。正義曰、昭二十五年左伝云、公徒執<sup>レ</sup>冰而踞。字雖<sup>レ</sup>異、音義同。服虔云、冰、櫝丸蓋。杜予云、或説櫝丸是箭筈、其蓋可<sup>二</sup>以取<sup>レ</sup>飲。先儒相伝柎為<sup>二</sup>覆<sup>レ</sup>矢之物<sup>一</sup>。且下句言<sup>レ</sup>鬯弓、明<sup>二</sup>上句<sup>一</sup>言<sup>レ</sup>覆<sup>レ</sup>矢可知矣。故云、柎所<sup>二</sup>以覆<sup>レ</sup>矢。鬯者、盛<sup>レ</sup>弓之器。鬯弓、謂<sup>レ</sup>弼<sup>レ</sup>弓而納<sup>二</sup>之鬯中<sup>一</sup>。故云鬯<sup>レ</sup>弓弼<sup>レ</sup>弓、謂藏<sup>レ</sup>之也。

とある点に注目したい。この中に「柎」についての注釈があるが、「小笠原家に秘蔵する字」にかかわる内容が見られないのである。つまり、「集註」のこの理解は「伝箋」や『毛詩正義』など中国の注釈書からの引用とはいえない。ゆえに日本の、特に中世の『毛詩』の注釈書や聞書などを参考にした可能性が考えられる。

次に、先にあげた『毛詩抄』『大叔于田』篇の引用部に注目したい。

#### 抑積柎忌 抑鬯弓忌

小笠原家に秘蔵する字共ぞ。矢を入うとて、矢筒のふ

たを取たぞ。左の昭二十五に、公徒執冰而踞、氷と柎とが同物ぞ。踞はアソブ ウズイセリ アダユキス 三の点があるぞ。柎は矢づつのふたぞ。服虔注に、氷は櫝丸の蓋とした。矢づつのふたの事ぞ。其ふたで飲をとるべしとした程に、水などをものむ様な物ぞ。まう狩がはつる程に、弓をもゆみ袋へ入たぞ。鬯は盛弓器ぞ。弓を弛して鬯中へ入たぞ。大全には弓囊也としたぞ。輶と同。注、蓋と云は、矢にもふたをして置ぞ。弼も弓ぶくろ迄ぞ。

「抑積柎忌 抑鬯弓忌」について、「小笠原家に秘蔵する字共ぞ」という指摘が見られることが注目される。他の『毛詩』の注釈書や聞書においてはまったく見られない説である。このことから、「集註」の「小笠原家に秘蔵する字也」は『毛詩抄』を経由した引用といえるのではないか。

また『毛詩抄』に、「左の昭二十五に、公徒執冰而踞、氷と柎とが同物ぞ」とあるが、これは『春秋左氏伝』『昭公二十五年』の「公徒積甲執冰而踞」を指す。この「氷」字は、「柎」と同じく、「矢筒のふた」の意味である。この内容は、『春秋左伝正義』の、

公徒積<sup>レ</sup>甲執<sup>レ</sup>冰而踞。言無<sup>二</sup>戰心<sup>一</sup>也。氷、櫝丸蓋。或云櫝丸是箭筈。其蓋可<sup>二</sup>以取<sup>レ</sup>飲。踞音据、櫝音独、丸、胡官反、箭音童、又音動、一音勇。疏公徒至<sup>二</sup>而踞<sup>一</sup>。正義曰、二十七年伝説<sup>二</sup>此事<sup>一</sup>云、豈其伐<sup>レ</sup>人而説<sup>レ</sup>甲執<sup>レ</sup>冰以游<sup>一</sup>。則此踞是游也。曲礼云、遊無<sup>二</sup>倨<sup>一</sup>。倨是慢也、謂傲慢而遊戲。注言無至<sup>二</sup>取飲<sup>一</sup>。正義曰、賈逵云、氷、櫝丸

蓋也。則是相伝爲「此言」也。方言曰、弓藏謂「之韃」、或謂「之櫝丸」。如「彼文」、則櫝丸是盛「弓」者也。此或說櫝丸是箭筈、其蓋可「以取」飲。十三年伝云、司鐸射「奉壺」飲「冰」、謂執「此」也。詩云、抑積「棚忌」、抑「棚」弓忌。棚藏「弓」、則冰藏「矢」也。毛伝云、棚所以覆「矢」。棚与冰、字雖「異」、音義同、是一器也。

という部分にも見られるが、『毛詩正義』、

昭二十五年左伝云、公徒執「冰」而踞。字雖「異」、音義同。服虔云、冰、櫝丸蓋。杜予云、或說櫝丸是箭筈、其蓋可「以取」飲。先儒相伝棚爲「覆」矢之物、且下句言「棚」弓。明上句言「覆」矢可知矣、故云「棚所以覆」矢。「棚者、盛「弓」之器。棚「弓」、謂「覆」弓而納「之」棚中」、故云「棚」弓「覆」弓、謂藏「之」也。

の部分と合わせて見ると、『毛詩抄』の、

小笠原家に秘藏する字共ぞ。矢を入うて、矢筒のふたを取たぞ。左の昭二十五に、公徒執冰而踞、氷と棚とが同物ぞ。踞はアソブ ウズイセリ アダユキス 三の点があるぞ。棚は矢づつのふたぞ。服虔注に、氷は櫝丸の蓋とした。矢づつのふたの事ぞ。其ふたで飲をとるべしとした程に、水などをものむ様な物ぞ。まう狩がはつる程に、弓をもゆみ袋へ入たぞ。棚は盛弓器ぞ。弓を弛して棚中へ入たぞ。大全には弓囊也としたぞ。輶と同。注、蓋と云は、矢にもふたをして置ぞ。覆も弓ぶくろ迄ぞ。

傍線部以外の引用部分はほぼ『毛詩正義』と一致しており、『春秋左氏伝』からではなく、『毛詩抄』に基づく間接的な引用

と見られる。『集註』にも「左伝昭二十五年曰、公徒執冰而踞水云々。服虔が注に冰櫝丸蓋とす、矢筒の蓋也。其にて飲を取べしとあり、水など吞やうなる物也」とあり、「左伝昭二十五年」と明記しているが、これも『毛詩抄』を経由した引用である可能性が高いのではないか。

以上のように、『伊勢物語』第六段の「弓やなくひ」を注釈する際、『集註』は「弓やなくひ」にかかわって『毛詩』を出典と明記して「采薇」と「大叔于田」の引用しているが、内容的には『毛詩抄』にしか見られない「小笠原家に秘藏する字共ぞ」という部分が見られることから、『集註』が引用する『毛詩』は、『毛詩』原典、あるいは『毛詩』とともに享受された「伝箋」、『毛詩正義』など中国の『毛詩』注釈書ではなく、『毛詩抄』に依拠したものと考えられる。それは、『毛詩抄』の独自の語釈だけではなく、『毛詩抄』が『毛詩正義』から引用する『春秋左氏伝』についても『集註』がそのまま引用していることなどからも窺われる。ゆえに、『集註』第六段注は、『毛詩抄』を忠実に引用していると指摘できる。

## 二

次に、『伊勢物語』第二十三段に注目したい。原文は以下と

むかし、ゐなかわたらひしける人の子ども、井のもとにいでて遊びけるを、おとなになりければ、男も女もはぢかはしてありけれど、男はこの女をこそ得めと思ふ、女はこの男をと思ひつつ、親のあはすれど聞かでなむありける。



さて、このとなりの男のもとより、かくなむ。

筒井つの井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに

女、返し、

くらべこしふりわけ髪も肩すぎぬ君ならずしてたれかあぐべき

などいひひて、つひに本意のごとくあひにけり。

さて年ごろふるほどに、女、親なく、頼りなくなるままに、もろともにいふかひなくてあらむやはとて、河内の国、高安の郡に、いき通ふ所いできにけり。さりけれど、このもとの女、あしと思へるけしきもなく、いだしやりければ、男、こと心ありてかかるにやあらむと思ひうたがひて、前裁のなかにかくれあて、河内へいぬるかほにて見れば、この女、いとう化粧じて、うちながめて、風吹けば沖つしら浪たつた山夜半にや君がひとりこゆらむとよみけるを聞きて、かぎりなくかなしと思ひて、河内へもいかずなりにけり。

まれまれかの高安に来て見れば、はじめこそ心にくもつくりけれ、いまはうちとけて、手づから飯匙とりて、筒子のうつはものにもりけるを見て、心憂がりて、いかずなりけり。さりければ、かの女、大和の方を見やりて、

君があたり見つつを居らむ生駒山雲なくしそ雨はふるとも

といひて見だすに、からうじて大和人、「来む」といへり。よろこびて待つに、たびたび過ぎぬれば、

君来むと言ひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬものの恋ひつぞ経る

といひけれど、男、すまずなりにけり。

「筒井筒」として知られる『伊勢物語』第二十三段では、大和の女は幼なじみの男と結婚した後、他の女の所へ通う夫を「あしと思へるけしきもなく」送りだし、「いとう化粧じて、うちながめて」、さらに「風吹けば沖つしら浪たつた山夜半にや君がひとりこゆらむ」と歌を詠み、夫の身を案じる。その夫への一途な愛によって、ついに夫の心を取り戻した、という内容である。

『集註』は、この第二十三段の冒頭から、「さて、このとなりの男のもとより、かくなむ」までの部分について以下のように注釈する。

師云、此段奔女を刺れり。六礼行ひ、父母に告ずして夫婦となるを奔女といふ。畢竟上たる人礼法を行はぬ故に下乱る也。第三段に二条后を父母のおぼしたつる事、礼法をそむき男女の別なきゆへに、業平とみそかごとあり。同じ代なれば下々は上を似せる習ひ也。爰も父母にかくして淫奔す、その中に品いやしきはやく捨らる。身上定らぬは奔女の常の事也。礼なくしての事なれば、義理を男女ともに思はぬゆへなり。

師云、道ある世には法を恐て奔女なし。詩経大車篇曰、大車檻々、毳衣如茨。豈不爾爾。一思。畏。子不。敢。云々。檻は車の行声なり。毳は大夫の服也。古には大夫巡行して男女の乱を正す、それがこはさに、男

を思はぬではけれども、礼をおこなはれぬに淫奔する事はならぬと云也。

『集註』からは第二十三段全体を「奔女を刺れり」という段として理解する態度が窺える。「六礼行ひ、父母に告ずして夫婦となる」女は「奔女」だという。続く「第三段に二条后を父母のおぼしたつ事」から、『伊勢物語』第三段で、二条后がまだ女御として入内する前に、「ひじき藻」の歌をかわし、業平とひそかに通じ合っていたことをあげながら、父母に隠して男と交際することは礼法にそむくと主張する。さらに、『毛詩』の王風「大車」篇を引用しつつ、「道ある世には法を恐れて奔女なし」と強調する。「奔女」という語が『集註』第二十三段注の中に繰り返され、それは『毛詩』とともにあらわれているのである。

『伊勢物語』注釈史における『集註』以前の『伊勢物語』注釈書の中には、「奔女」の用例が見られない。例えば、

『伊勢物語肖聞抄』

此段に、有常か女と名をあらはすは、貞女の名譽をしらする故也。

『伊勢物語惟清抄』

此段ヲハ。紀有常カ女ノ事ト云ハ。貞女ノ所ヲ。アラハサント也。

『伊勢物語闕疑抄』

此段を、紀の有常が女の事といふは、貞女の所を顕さん爲也。

など、第二十三段の幼なじみの女は紀有常の娘であり、貞女の

名譽をあらわす一段として注釈するのが通説となっている。

『集註』はそれ以前の注釈書とまったく違う理解で、

師云、闕疑抄などに、此女を有常が女と名を指事あし、有常が女は業平の本妻にて、礼を以てまうけたり、爰は奔女ほんじょの事を云たる段也。古今も新古今にも有常が女と云事なし、押て名をさすこと道理にそむけり。

と、幼なじみの女は有常の娘ではなく、これは「奔女」を諷刺する一段であると強調する。なぜ『集註』以前の『伊勢物語』注釈書には全く見られない「奔女」という語が『集註』にあらわれるのか、また、引用されている『毛詩』とどのような関係を持っているのか。まず「奔女」に注目しよう。

中国の、現存する最古の字書『説文解字』によると、「奔」は天部に属し、金石文では字上部は「夭」で、下部は三つの「止」の字となり、「走る」の意味である。

春秋時代を扱った歴史書の『国語』『周語上』には、「恭王游于涇上」、密康公従、有「三女奔」之「があるが、その中の「奔」は、「なれあふ。正式の礼を踏まないで結婚する。野合」という意味である。

『毛詩』の中では、邶風「鶉之奔奔」篇に「鶉之奔奔、鵲之疆疆。人之無良、我以為兄」、周頌「清廟」篇に「對越在天、駿奔走在廟。不顯不承、無射於人斯」などの用例があり、「奔」は「走る」の意味をとる。王風「大車」の「大車啍啍、毳衣如璫。豈不爾思、畏子不奔」に「奔」が見られ、「淫奔」を表す。

『礼記』「内側」には「聘則為妻、奔則為妾」ともある。



聘礼があるのは妻になるが、ないほうが妾になる、の意である。

日本の中世でよく用いられていた元の字書『古今韻会举要』には、「堂上謂<sub>レ</sub>之歩<sub>一</sub>、門外謂<sub>レ</sub>之趨<sub>一</sub>、中庭謂<sub>レ</sub>之走<sub>一</sub>、大路謂<sub>レ</sub>之奔<sub>一</sub>（中略）左伝作<sub>レ</sub>賁<sub>一</sub>という用例があり、「奔」は大路に走るという意味を表す。また「引<sub>レ</sub>詩鶉之賁賁（中略）奔字古作<sub>レ</sub>犇、礼韻重出<sub>レ</sub>犇字<sub>一</sub>という説明がある。つまり『毛詩』の鄘風「鶉之奔奔」の「奔」は古くは「賁」と書いた場合もあり、「犇」は「奔」の異体字として、宋の礼部の科挙に用いるための韻書『礼部韻略』に頻出するのである。しかし、『古今韻会举要』の中には男女交際、礼儀などに関わる「奔女」の「奔」に当てはまる意味や用例が見られないことが窺われる。

以上の調査から見ると、「奔」という字には、本来は「走る」の意味がある。『国語』に「恭王游<sub>三</sub>于涇上<sub>一</sub>、密康公従、有<sub>三</sub>三女奔<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>」、「毛詩」に「大車啍啍、轟衣如<sub>レ</sub>璫。豈不<sub>三</sub>爾思<sub>一</sub>、畏<sub>レ</sub>子不<sub>レ</sub>奔<sub>一</sub>」、「礼記」に「聘則為<sub>レ</sub>妻、奔則為<sub>レ</sub>妾」などとなるように、春秋時代から、男女交際、礼儀に関わる「奔」の使い方もすでに現れたが、元の字書『古今韻会举要』まで、辞書類には定着していない状況が確認できる。

また、「奔女」という語は、正式の礼を備へないで男の許に走る女、淫奔女という意味である。早い段階で、漢の『列女伝』(辯通)篇の「斉宿瘤女」に

宿瘤女者、斉東郭採<sub>レ</sub>桑之女、閔王之后也。項有<sub>三</sub>大瘤<sub>一</sub>、故号曰<sub>三</sub>宿瘤<sub>一</sub>。初閔王出遊、至<sub>三</sub>東郭<sub>一</sub>。百姓尽<sub>レ</sub>觀、宿瘤女採<sub>レ</sub>桑如<sub>レ</sub>故。王怪<sub>レ</sub>之、召問曰、寡人出遊、車騎甚衆。百姓無<sub>三</sub>少長<sub>一</sub>、皆棄<sub>レ</sub>事來觀、汝採<sub>三</sub>桑道旁<sub>一</sub>、曾不<sub>三</sub>一

視<sub>一</sub>、何也。対曰、妾受<sub>三</sub>父母教<sub>一</sub>採<sub>レ</sub>桑、不<sub>レ</sub>受<sub>三</sub>教<sub>一</sub>觀<sub>三</sub>大王<sub>一</sub>。王曰、此奇女也。惜哉、宿瘤。女曰、婢妾之職、属<sub>レ</sub>之不<sub>レ</sub>二、予<sub>レ</sub>之不<sub>レ</sub>忘。中心謂<sub>レ</sub>何。宿瘤何傷。王大悦<sub>レ</sub>之曰、此賢女也。命<sub>三</sub>後車<sub>一</sub>載<sub>レ</sub>之。女曰、頼<sub>三</sub>大王之力<sub>一</sub>、父母在<sub>レ</sub>内、使<sub>下</sub>妾不<sub>レ</sub>受<sub>三</sub>父母之教<sub>一</sub>、而隨<sub>三</sub>大王<sub>一</sub>、是奔女也。大王又安用<sub>レ</sub>之。王大慚曰、寡人失<sub>レ</sub>之。又曰、貞女一礼不<sub>レ</sub>備、雖<sub>レ</sub>死不<sub>レ</sub>從。於是王遣<sub>レ</sub>婦、使<sub>下</sub>使者加<sub>三</sub>金百鎰<sub>一</sub>、往聘<sub>中</sub>迎<sub>レ</sub>之。

という内容があり、「父母之教」をうけず「大王」に従えば「奔女」になる。その後、唐の「蒙求」「宿瘤採桑」の注に、古列女伝、斉閔王之后、項有<sub>三</sub>大瘤<sub>一</sub>、号曰<sub>三</sub>宿瘤<sub>一</sub>。初閔王出遊至<sub>三</sub>東郭<sub>一</sub>、百姓尽<sub>レ</sub>觀。宿瘤採<sub>レ</sub>桑如<sub>レ</sub>故。王怪問曰、寡人出遊、百姓無<sub>三</sub>少長<sub>一</sub>皆來觀。汝不<sub>三</sub>一視<sub>一</sub>何也。対曰、妾受<sub>三</sub>父母教<sub>一</sub>採<sub>レ</sub>桑、不<sub>レ</sub>受<sub>三</sub>教<sub>一</sub>觀<sub>三</sub>大王<sub>一</sub>。王曰、此奇女。惜哉宿瘤。女曰、婢妾之職、属<sub>レ</sub>之不<sub>レ</sub>二、予<sub>レ</sub>之不<sub>レ</sub>忘<sub>一</sub>中心<sub>一</sub>謂<sub>レ</sub>何。宿瘤何傷。王大悦曰、此賢女也。命<sub>三</sub>後乘<sub>一</sub>載<sub>レ</sub>之。女曰、父母在<sub>レ</sub>内、使<sub>下</sub>妾不<sub>レ</sub>受<sub>三</sub>教<sub>一</sub>、而隨<sub>三</sub>王<sub>一</sub>、是奔女也。王安用<sub>レ</sub>之。王大慚、遣<sub>レ</sub>婦、使<sub>下</sub>使者奉礼加<sub>三</sub>金百鎰<sub>一</sub>、往聘<sub>中</sub>贈<sub>レ</sub>之。

と『列女伝』を引用している。宋の類書『太平御覧』五十九「醜婦人」にも「女不受父母之教而隨大王是奔女也」があり、同じく『列女伝』を引用するのである。

つまり、「奔女」という語の使用は『列女伝』にまで遡ることができ、「蒙求」、「太平御覧」などの類書に引用され

ることが窺われる。

一方、鎌倉時代初期の源光行『蒙求和歌』第五・恋部「宿瘤採桑」に、

#### 宿瘤採桑

宿瘤ハ齊東郡郭ノ女也。項ニシヒ子アルユエニ宿瘤トナツケハリ。閔王アソヒニイテ、東郭ニイタリ給ニ。サトヒトコトコトクニハシリサワキテミタマツルニ。宿瘤桑ノハヲトリテヨコメモセサリケルヲ。王チカクヨリテミ給ニ。ナメキヨシアリテ。カホアカメテハチシメラヘルサマナリ。人コトニ王ヲミタマツルニ。宿瘤ミヲウコカスコトナキユエヲトハル、ニ。我カチ、ハ、桑ヲトレト云ツレハ。桑ヲトリハムヘルナリ。王ヲミタマツレトハイハサリツトコタヘ申ニ。イカニモユエアルヘキモノトオホシテ。車ニメシノセラル、ニ。我父母内ニアリ。コ、ヨリメサレテマキラムコトハ。ステニ奔女ニニタリ。後ニトノカレ申ニ。オクフカキ心ヲハチテ。イト、心ヲウツシタマヒツ。サテカヘリ給テ。黄金百鎰ヲツカハシテムカヘ給ニ。とあり、『蒙求』「宿瘤採桑」の故事を和訳するのである。傍線部「我父母内ニアリ。コ、ヨリメサレテマキラムコトハ。ステニ奔女ニニタリ」は『蒙求』注の「父母在内使妾不受教而随王是奔女也」という原文の和訳として、「奔女」という語の意味変化が見られない。

『蒙求』大永五年書写本の頭注「不納采礼而娶謂奔女也」から、「奔女」は「采礼」、「娶」と関わり、婚姻儀礼の粹で意味が生じる。

『蒙求』講義の問書『蒙求抄』に、

私が父母ガ家中ニ候教モ受イディツタラハ奔女ソ毛詩ニアルコトソ妻ヲムカエルニハ六礼ガアルゾ其礼ヲセイテ我トウシ野外ナドデ云合スルヲ奔女ト云ソ奔女ヲ后ニセラレテハ何カヨカラウゾト云ソ

という内容が見られる。傍線部「野外ナドデ云合スルヲ奔女ト云ソ」は、礼がなく野外であう行動を起こしたら奔女となるという理解が婚姻儀礼の面に拘らず、一般儀礼にかかわる傾向が窺われる。

また、『玉塵抄』「淇」の項目には、次のようにある。

淇水名詩送我乎之上桑中桑中の詩ハ毛ノ第三ニアリ鄘国風之中ナリ桑中ノ詩ハ奔ヲ刺タソ奔ハハシルナリ奔女ト云ハ人ノ女ガ邪淫ニメ本ノヲトコカクイテヨソノヲトコラスルコトソソンチアウソコデイツ夜ヨリアワウト云コトヲ約シテヌスミカクレテデヤウソコ、ラニモデアイト云ゲナソヨメリセヌワカイ女モナカタチアツテムカイノヲトコ縁ヲ云イ定テ六礼ヲト、ノエテヨメリムカユル者ナリソレモセイデヌスミハシクテヲトコラスルソ女ヲ桑ノ采ソトリ桑ノモトニ細タチヨルホド桑ノモト桑ノ林ノ中ヤアタリテデヤウソコ、ノ桑中ノ詩モソノコトソ桑中ノ詩ハ衛ノ君モ夫人モ男女トモニ淫奔シテ政ヤブレスタツタソ

傍線部のように、「奔女」をすでに婚姻にとどまらず、男女交際にも適用し、「邪淫」、「淫奔」などの言葉と同時に使うようになる。

以上から見ると、「奔女」という言葉は漢籍から出典し、『列

女伝、『蒙求』のルートを通して日本に伝わって、中世の抄物にあらわれるようになることがわかる。『集註』は抄物から影響を受けて「奔女」を用いている可能性が極めて高いと考えられる。

### 三

次に、『集註』第二十三段注の中に見られる「奔女」の語について考察する。具体的には、ここに同時に引用される『毛詩』と、どのような関係を持っているかという問題に注目する。『集註』第二十三段注冒頭に、「師云、此段奔女を刺れり」と、師説に言及し、さらに、

師云、道ある世には法を恐て奔女なし。詩經大車篇曰、大車檻々、毳衣如蒺。豈不爾思。畏子不敢云々。檻は車の行声なり。毳は大夫の服也。古には大夫巡行して男女の乱を正す、それがこはさに、男を思はぬではなけれども、礼をおこなはれぬに淫奔する事はならぬと云也。

と注釈する。「道ある世には法を恐て奔女なし」について説明するために、『毛詩』「大車」篇を引用している。

『毛詩』「大車」篇に、

大車檻檻 毳衣如蒺 豈不爾思 畏子不敢

と見られ、『毛詩正義』に、

大車檻檻、毳衣如蒺。大車、大夫之車。檻檻、車行声也。毳衣、大夫之服。蒺、雛也、苳之初生者也。天子大夫四命、其出封五命、如子男之服。乘其大車、檻檻

然、服毳冕以決訟。箋云、蒺、苳也。古者、天子大夫服毳冕以巡行邦国、而決男女之訟。則是子男入為大夫者。毳衣之属、衣纁而裳纁、皆有五色焉、其青者如雛。豈不爾思、畏子不敢。畏子大夫之政、終不敢。箋云、此二句者、古之欲淫奔者之辞。我豈不思与女以無礼与。畏子大夫来聴訟、将罪我、故不敢也。子者、称所尊敬之辞。

とある。『毛詩抄』の、大車檻檻たり、毳衣蒺の如し。豈・爾ぢを思はざらんや、子に畏て敢てせず

とあわせて見ると、「大車檻々たり、毳衣如蒺。豈不爾思。畏子不敢云々」は原文の引用、「檻は車の行声なり。毳は大夫の服也」は「檻」と「毳」、それぞれの意味の説明であることがわかる。

また、「古には大夫巡行して男女の乱を正す、それがこはさに、男を思はぬではなけれども、礼をおこなはれぬに淫奔する事はならぬと云也」は、同じく『毛詩正義』の、

正義曰、經三章、皆陳古者大夫善於聴訟之事也。陵遲、猶「陂陀」、言「礼義廢壞之意」也。男女淫奔、謂「男淫而女奔」之也。檀弓曰、合葬、非「古」也。自「周公」以來、未之有改。然則周法始「合葬」也。經称死則同穴、則所陳古者、陳「周公」以來賢大夫。（中略）豈不爾思、畏子不敢。畏子大夫之政、終不敢。箋云、此二句者、古之欲淫奔者之辞。我豈不思与女以無礼与。畏子大夫来聴訟、将罪我、故不敢也。（中略）

いう部分と、『毛詩抄』の、大車は周の大夫を刺れり。礼義・陵遅して、男女・淫奔す。故に古を陳べて以て今の大夫の男女の訟を聴くこと能はざることを刺る。

此女の方から云ぞ。礼儀を違へてなり共、そなたへあいま  
らせたい、かう思はぬではない。去共、士大夫の成敗せら  
れうが絶い程に、えならぬぞと云也。古はかやうに民にを  
ぢられたが、今はさうないよと刺たぞ。是が古をのべて今  
を刺ると云処ぞ。

という部分を見ると、『集註』が「豈不爾思 畏予不敢」について言うところは、『毛詩』の注釈書、抄物などと共通していることがわかる。

ところで、『集註』第二十三段注の「毛詩」「大車」篇は「道ある世には法を恐て奔女なし」を説明するためにあげられていると見られるが、「奔女」とのかかわりは見られない。『集註』は、『伊勢物語』第二十三段冒頭の部分だけでなく、最後の、「(君来むと言ひし夜)ことに過ぎぬれば頼まぬものの恋ひつつぞ

詩経ノ三賦篇ニエノセンコウ衛宣公ハハシノミの時に上下淫奔カガシムイソトして男にたらされのち後  
に捨てられて配偶ハツグウを失はつて後悔こうかいする事をいへり外言ゲガハシ不レ  
入トキギミ於ニ閨イニ一内言ダイシヤン不出サツトキギミ閨イニこそ礼記の法なるに男女オトコメ一レ  
に於て媒なしに会あする果はては皆如此也みな也男女オトコメ無レ別淫風バツインフウ也  
と『毛詩』の衛風「氓」篇を引用して、主人公の男と高安の女  
は「媒なし会する」ことになるのは当然であるという結論を導いて  
失て後悔する」ことになるのは当然であるという結論を導いて  
おり、本段の注においても「奔女」という言葉が見られてもよ  
いところである。

【集註】の「衛宣公の時に、上下淫奔して男にたらされ、後に捨てられて配偶を失て後悔する事をいへり」は、『毛詩正義』に、  
氓、刺時也。宣公之時、礼儀消亡。淫風大行、男女無別、遂相奔誘。華落色衰、復相棄背。或乃困而自悔、喪其配偶、故序其事以風焉。美反正、刺淫佚也。  
とあり、『毛詩抄』にも、

氓は時を刺れり。宣公が時に、礼儀消亡して、淫風大に行はる。男女別無し、遂に相奔り誘く。華落ち色衰へて、復相棄て背く。或は乃困びて自ら其の妃偶を喪へることとを悔ゆ。故に其の事を序でて以て風す。正に反ることを美て、淫佚を刺る

のように、一紙篇の成立事情についての説明のなかに見られる。また、『集註』の「外言不<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>於闔<sub>一</sub>内言不<sub>レ</sub>出闔こそ礼記の法なる」の、「礼記の法」と明記しているところは、『礼記』

「曲礼上」、

男女不<sub>レ</sub>雜坐、不<sub>レ</sub>同<sub>二</sub>櫛枷、不<sub>レ</sub>同<sub>二</sub>巾櫛、不<sub>二</sub>親授、嫂叔不<sub>レ</sub>通問、諸母不<sub>レ</sub>漱<sub>レ</sub>裳<sub>一</sub>。外言不<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>於閨<sub>一</sub>、内言不<sub>レ</sub>出<sub>二</sub>於閨<sub>一</sub>。女子許<sub>レ</sub>嫁纓、非<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>大故<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>其門<sub>一</sub>。姑姊妹女子子。已<sub>レ</sub>嫁而反、兄弟弗<sub>レ</sub>與<sub>二</sub>同席而坐<sub>一</sub>、弗<sub>レ</sub>與<sub>二</sub>同器而食<sub>一</sub>。皆為<sub>二</sub>重別防淫乱<sub>一</sub>。不<sub>二</sub>雜坐<sub>一</sub>、謂<sub>二</sub>男子在<sub>レ</sub>堂、女子在<sub>レ</sub>房也。櫛可<sub>二</sub>以枷<sub>レ</sub>衣者。通問謂<sub>二</sub>相称謝<sub>一</sub>也。諸母、庶母也。漱、浣也。庶母賤。可<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>漱<sub>レ</sub>衣、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>漱<sub>レ</sub>裳。裳賤、尊<sub>レ</sub>之也。尊<sub>レ</sub>之者亦所以遠<sub>レ</sub>別。外言、内言、男女之職也。不<sub>二</sub>出入<sub>一</sub>者、不<sub>二</sub>以相問<sub>一</sub>也。閨、門限也。女子許<sub>レ</sub>嫁繫<sub>レ</sub>纓。有<sub>二</sub>從<sub>レ</sub>人之端<sub>一</sub>也。大故、宮中有<sub>二</sub>災變若疾病<sub>一</sub>、乃後入也。女子有<sub>レ</sub>宮者、亦謂<sub>二</sub>由<sub>二</sub>命士<sub>一</sub>以上上<sub>一</sub>也。春秋伝曰、群公子之舍、則已卑矣。女子十年而不<sub>レ</sub>出。嫁及成人可<sub>二</sub>以出<sub>一</sub>矣。猶不<sub>下</sub>與<sub>二</sub>男子共席而坐、亦遠別也。

の部分に確認できるが、『毛詩正義』にも、

言<sub>二</sub>男女無<sub>レ</sub>別者、若<sub>二</sub>外言不<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>於閨、内言不<sub>レ</sub>出<sub>二</sub>於閨<sub>一</sub>、是有<sub>レ</sub>別也。今交見<sub>二</sub>往来<sub>一</sub>、是無<sub>レ</sub>別也。奔誘者、謂<sub>二</sub>男子誘<sub>レ</sub>之、婦人奔<sub>レ</sub>之也。華落、色衰、一也、言<sub>二</sub>顏色之衰<sub>一</sub>、如<sub>二</sub>華之落<sub>一</sub>也。或乃困而自悔者、言<sub>二</sub>當時皆相誘<sub>一</sub>、色衰乃相棄、其中或有<sub>二</sub>困而自悔棄喪<sub>二</sub>其妃耦<sub>一</sub>者、故叙<sub>二</sub>此自悔之事<sub>一</sub>、以風<sub>二</sub>刺其時<sub>一</sub>焉。美者、美<sub>二</sub>此婦人反<sub>レ</sub>正自悔<sub>一</sub>、所<sub>二</sub>以刺<sub>二</sub>當時之淫佚<sub>一</sub>也。復相棄背以上、總言<sub>二</sub>當時一國之事<sub>一</sub>。或乃困而自悔以下、叙<sub>二</sub>此絰所<sub>レ</sub>陳者<sub>一</sub>、是困而自悔之辭也。上二章說<sub>二</sub>女初奔<sub>レ</sub>男之事<sub>一</sub>、下

四章言<sub>二</sub>困而自悔<sub>一</sub>也。言既遂矣、至<sub>二</sub>於暴<sub>一</sub>矣、是其困也。躬自悼矣、尽亦已焉哉、是自悔也。とあり、『毛詩抄』にも、

無別と云は外言不入於閨、内言不出於閨、と云て一切知せぬが礼記の法であるぞ。あるを今一處にいて、男子が女をたらいだ程に、誠かと思ふて行ぞ。誘と云を男にかけ、奔と云を女にかけて見よぞ。十日の紅と云も、やがて衰るぞ。人も二十から三十に成て衰るは、ちやつとの事ぞ。新昏に淫して、もとの女をば捨てたぞ。始たらされて、其間辛苦辛勞をして、色衰へて捨てられて、男女の配偶を失たを後悔した事ぞ。爰を風刺して作たぞ。と見られる。

『集註』の「外言不<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>於閨、内言不<sub>レ</sub>出<sub>二</sub>於閨<sub>一</sub>」は、「氓」篇にかかわり、『毛詩正義』、『毛詩抄』などにも言及が見られることから、『礼記』から直接引用されたのではなく、『毛詩正義』、『毛詩抄』などを經由して享受されたものではないか。

『集註』は、この段について、「男女一所にゐて、媒なしに会する果は皆如此也」と結論をつけている。これは、見てきたように、『毛詩正義』、『毛詩抄』と共通しており、『集註』独自の内容とは言えないが、「媒なしに会する果は皆如此也」という点を強調するところに、『集註』の独自性が窺われる。このような態度は、後に述べるように、『毛詩抄』「氓」篇の「匪我愆期 子無良媒 将子無怒 秋以為期」の句について、いやと云は、媒もあらうずに、直に仰らるゝは何とした事ぞ。媒で仰られいぞ。いくまいでは候ぬ。かまいて腹立な

せられそ。秋に成て参う、媒を尋て仰られいぞ。さ無ければ、奔女に成候程にぞ。

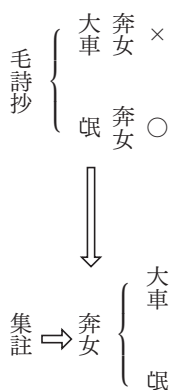
と見られる、媒がなければ奔女になるから、良い媒を探して私のところに尋ねてくださいという女性の願いをいうところと共通すると見るべきではないか。その中に、「(媒) 無ければ、奔女に成候程にぞ」とあり、「奔女」という語があらわれている。

一方、『毛詩正義』該当の部分を見ると、

男子欲<sub>レ</sub>即<sub>二</sub>於夏中<sub>一</sub>以<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>期、已即謂<sub>レ</sub>之、非<sub>二</sub>我欲<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>子之期<sub>一</sub>、但子無<sub>二</sub>善媒<sub>一</sub>来<sub>レ</sub>告<sub>二</sub>其期時<sub>一</sub>、近恐難<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>会、故願子無<sub>レ</sub>怒<sub>二</sub>於我<sub>一</sub>、与<sub>レ</sub>子秋以<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>期。(中略)又下云<sub>二</sub>匪<sub>二</sub>我愆<sub>レ</sub>期、則男子於<sub>レ</sub>此与<sub>レ</sub>之設<sub>レ</sub>期也、故知<sub>二</sub>且<sub>二</sub>為<sub>二</sub>会期<sub>一</sub>。

と『毛詩抄』とほぼ一致するが、ここには「奔女」という語は見られない。

つまり、『集註』第二十三段注の、「媒なしに会する果は皆如此也」を強調する態度と「奔女」の理解は、『毛詩』そのものから得たものではないというだけでなく、「伝箋」、さらに『毛詩正義』など注釈書を経由した理解でもない。それは『毛詩抄』に依拠したものと考えられる。左の図に示すように、



第二十三段注は、『毛詩抄』「氓」篇のような「奔女」があらわれる章段から「奔女」の概念を得て、「奔女」があらわれない『毛詩抄』「大車」篇とも関連づけて、なぜ『伊勢物語』第二十三段が「媒」を重視して「奔女」を風刺する一段なのか、という問題を説明しようとしたものではないか。

『集註』第二十三段注の『毛詩』の引用は、『毛詩抄』からの引用と見られるが、先述した『集註』第六段注の、忠実な引用とは異なり、『毛詩抄』から習得した概念を主体的に活かして、注釈するものであることが窺える。

おわりに

『集註』が『伊勢物語』を注釈する際、大量にあげる『毛詩』は、『毛詩』そのもの、或いは「伝箋」、「毛詩正義」など注釈書からの引用ではなく、清原宣賢の『毛詩抄』に依拠していることと見られる。『集註』第六段注は『毛詩抄』を忠実に引用する典型的な例である。そこに見られる、『毛詩』と同時に引用される漢籍、例えば『左伝』なども『毛詩抄』に見られるもので、直接的な引用ではなかった可能性が高い。

一方で、『伊勢物語』注釈史において『集註』以前にはまったく見られない、『集註』が『毛詩』とともに引用する「奔女」という語は、室町時代の抄物類、特に『毛詩抄』から引用した可能性が高い。

さらに、『集註』は単に『毛詩抄』の内容を引用することにとどまらず、第二十三段注に見られるように「奔女」等儒教的な概念と主張からヒントを得て、物語の登場人物の行動への批



判を通して、義理や礼法を繰り返し唱えている点が注目される。『集註』全体における『毛詩』の引用状況は、付録資料の表に示したように、ほぼ、『毛詩抄』から忠実に引用するものと、その説を活用して展開するものとに分けられる。

『集註』は、たとえば第二十三段注に見られるように、『伊勢物語』とは関係が薄い、「奔女」のような儒教的な概念を用い、全体を「奔女」を風刺する章段と捉えるような注釈をしている。この点は従来の注釈書とは異なる特徴といえる。『集註』では、物語を忠実に注釈する姿勢が後退している一方で、儒教的な概念、礼法を、物語を離れてまで主張する態度が強くなっている傾向が窺える。つまり、『伊勢物語』を注釈するために漢籍を引用しているというより、むしろ漢籍あるいはその注釈書や聞書を経由することで、そこに窺われる儒教的な認識、たとえば、「六礼行ひ、父母に告ずして夫婦となるを奔女といふ」等に向かおうとしているのではないか。『集註』の漢籍引用に具体的に注目することで、人々に愛読されている『伊勢物語』を通して男女の淫奔な行動を批判し、儒教的な徳目を主張して、教化、教育に向かおうとするこの注釈書の特異なありようが浮かび上がってくるのではないかと考える。

## 使用テキスト

『伊勢物語集註』…筑波大学附属図書館蔵承応二年刊本

『毛詩』…『詩経』新釈漢文大系

『毛詩正義』…『十三経注疏・毛詩正義』北京大学出版社

『毛詩抄』…『毛詩抄 詩経』岩波書店

『伊勢物語肖聞抄』…文明九年本 伊勢物語古注釈大成 第三卷 笠間書院

『伊勢物語惟清抄』…天理大学附属天理図書館蔵 伊勢物語古注釈大成 第四卷 笠間書院

『伊勢物語闕疑抄』…寛永十九年刊本 伊勢物語古注釈大成 第五卷 笠間書院

『説文解字』…静嘉堂蔵北宋刊本 四部叢刊初編

『古今韻会举要』…大化書局

『国語』…杭州葉氏蔵明嘉靖翻宋刊本 四部叢刊初編

『礼記』…上海涵芬楼蔵宋刊本 四部叢刊初編

『大漢和辞典』…大修館書店 修訂第二版

『列女伝』…景長沙葉氏觀古堂蔵明刊本 四部叢刊初編

『蒙求』…新釈漢文大系

『太平御覧』…静嘉堂文庫蔵宋刊本 四部叢刊三編

『日本国語大辞典』…小学館

『蒙求和歌』…内閣文庫蔵甲本 角川書店

『蒙求抄』…『抄物大系・蒙求抄』勉誠社

『玉塵抄』…『古辞書抄物 韻府群玉・玉塵抄』近思文庫古辞書研究会

付録表…伊勢―『伊勢物語』毛詩―『集註』が引用する『毛詩』章段 他―『集註』が引用する他の漢籍

37段	31段	23段	12段	9段	6段	5段	3段	1段	伊勢			
鄭風・有女同車	小雅・何人斯 大雅・蕩 召南・小星	衛風・氓 王風・大車	大雅・桑柔 小雅・小宛	小雅・無羊	秦風・黃鳥 鄭風・桑中 鄭風・大叔于田	小雅・采芣 鄭風・大車于田	大雅・綿	毛詩（書名） 小雅・采芣 王風・葛藟 小雅・賓之初筵	毛詩 鄭風・柏舟 鄭風・將仲子 檜風・匪風 小雅・賓之初筵			
	玉篇 尚書 孟子	左傳 漢書	左傳	禮記 尚書 漢書	論語	周禮 禮記 左傳 尚書 易經	禮記 易經	易經 禮記 尚書	他			
63段		58段		54段	49段	48段	46段	45段	42段	41段	40段	
周南・漢廣 衛風・凱風	小雅・庭燎 小雅・蓼蕭 曹風・鴈鳴	小雅・大田 小雅・楚茨 大雅・公劉	召南・行露	毛詩（書名） 鄭風・泉水 豳風・伐柯	小雅・角弓 王風・采芣	小雅・鴻雁	周南・關雎	秦風・兼葭 小雅・車攻	鄭風・雨無正 鄭風・蝥螋 蒙求 白居易	禮記 白居易		
劉向 孝經		禮記	左傳	周禮 孟子	論語	論語	素問 國語 文選	白居易	禮記 尚書	禮記 白居易		
83段	82段	81段	79段	77段	71段	69段	65段		64段			
小雅・鹿鳴 大雅・瞻仰	小雅・四月 小雅・大車	小雅・小弁 小雅・小弁	齊風・猗嗟 小雅・小弁	大雅・綿	小雅・小旻 小雅・小弁	周頌・時邁 曹風・下泉 小雅・車攻	小雅・正月		召南・草蟲	鄭風・靜女		
賈島	事林廣記	淮南子 曹植	禮記 黃庭堅	文選 禮記	周易	孟子 禮記 尚書	周禮 左傳 文選	廣韻 尚書 易經 中庸	論語	漢書		
125段	120段	116段	114段		113段	111段	104段	103段	100段	99段	93段	88段
大雅・采芣	衛風・氓	周頌・小毖 小雅・頍弁	齊風・盧令 鄭風・大叔于田	小雅・鸛鳴 小雅・車攻 小雅・吉日	大雅・思齊 周南・桃夭	小雅・節南山 鄭風・綠衣	魯頌・有駟	衛風・伯兮	大雅・韓奕 豳風・七月	小雅・巧言	小雅・常棣	
易經	資治通鑑		黃庭堅	周易 蘇東坡	周禮	尚書	左傳	禮記 千金方	論語 養生論	禮記	白居易	

- ①『日本古典文学大辞典』（岩波文庫・一九八三）第一巻の「伊勢物語集註」の項目による。
- ②筆者が作成した付録資料の統計による。
- ③『伊勢物語古註釈の研究』四四九頁・大津有一著・増訂版・八木書店・一九八六
- ④『鉄心斎文庫伊勢物語古注釈叢刊』第八巻・四八九頁・片桐洋一・山本登朗編・八木書店・二〇〇一
- ⑤『伊勢物語論』「文体・主題・享受」三六七頁・山本登朗・笠間書院・二〇〇一
- ⑥本論文で「毛詩」の原文を引用する際、当該部の「毛詩抄」の訓読を参考として後に付ける。
- ⑦『毛詩』「国風・王風」の「大叔于田」篇『十三經注疏』『毛詩正義』孔穎達の「毛詩正義」が日本に輸入された後「毛詩」の享受と研究はほぼ「毛詩正義」によって行われた（『毛詩抄 詩経』岩波書店一九九六 解説、緒言などによる）が、ここではそれぞれの説をわかりやすく示すために「毛伝」「鄭箋」を挙げる。なお、この点に関して、『毛詩抄 詩経』（岩波書店 一九九六）「小雅・節南山之什」の「小旻」篇には「古点を惡と申事は、いわれぬ事なれども、正義のわたらぬ前に付た点ぢや程に、ちがうたが名譽ぞ。何か正義のわたらぬに、付られう事ではないぞ。是が家の義ぞ。正義にちがうたと云てべたくとけされまいぞ」と述べており、清原家説と『毛詩正義』を対照しながら講義していたらしいことが窺われる。
- ⑧『有識故実大辞典』吉川弘文館・一九九六
- ⑨『春秋左伝注疏』「昭公二十五年」『十三經注疏』『春秋左伝正義』
- ⑩『大漢和辞典』鎌田正・米山寅太郎編・大修館書店・二〇〇〇
- ⑪『毛詩抄』を講述した清原宣賢は、「伝箋」、「毛詩正義」によりながら、さらに新注も参考にしていたと見られる。「伝箋」による古点の異同を明らかにし、大江家の訓読なども取り入れており、幅広く諸説を取捨選択し、「毛詩講述を集大成させていたことが、足利衍述氏（鎌倉室町時代之儒学）有明書房・一九七〇）など先学により研究されてきた。また、和島芳男氏の研究（『中世の儒学』新装版・吉川弘文館・一九九六）によると、清原宣賢は中央京師にあって、後柏原・

後奈良兩帝の侍読をつとめ、將軍家足利義植・義晴の師となり、三条西実隆から『毛詩』の合点を求められ、実隆の子公条の師となつて『毛詩』などを授けた。一方、本論文のはじめにすでに述べたが、『集註』が編纂された一華堂切臨は、実隆の孫実澄から切臨の師である乗阿へ伝えられた「奥義」を重んじて学統を受け継いでいた。それで、三条西家の学統を通して、一華堂乗阿と切臨が清原宣賢『毛詩抄』の影響を受ける可能性が十分であると考えられる。『毛詩抄』は『毛詩』の聞書として、比較的口語的な要素が多く、室町時代の国語資料として注目された。『集註』の『毛詩』の引用状況から、『毛詩抄』は江戸前期の『伊勢物語』注釈書に影響を与え、継承されることも窺える。

#### ⑬『伊勢物語集註』第二十三段注

#### 付記

本稿は平成三十年十月の筑波大学日本語日本文学会第四十一回大会において、『伊勢物語集註』における『毛詩』の引用の題目で発表した内容をもとにしたものです。御教示を賜った方々に深く御礼申し上げます。

（あんせい）筑波大学大学院 人文社会科学研究所